

心中宵庚申

近松門左衛門作

我が當惑掃除等もそこく。書院の筆架飾り石。生花も不調法ながら間に合するも奉公。地御内見の上御直し下されと詞も風も出過ぎざる。若菜と糠味噌のツシ味は屋敷に極りし。金田甚藏岡大橋何かく。君のお手際御事であらうか。さり乍ら人に心をつくさせ無下ない心が一つの疵と地目面

地花のお江戸へ六十里梅の難波へ六十里。

を吟味の役人。こりや目出鯛を三枚におろ

百二十里の間の宿都離れて遠江。濱松の一

し山葵は八百屋が請取。南京の皿蒔繪の家

城主淺山殿の御在國。町屋々々の賑ひ商賣

具。ツシ善壺したる響應なり。地組下の二番

にたゆみなく。武士は弓馬に怠らず隔日隔

ばえ金田甚藏岡軍右衛門大橋逸平。打揃う

日のお鷹狩。上一人の勵みよりツシ犬も油

たる血氣盛り立てかけのんこの頭がち。裾

斷はならざりし。お家相傳の弓頭坂部郷左

はお留守の勝手見廻り。いづれも御苦勞

衛門。六十の歳の夜晝なく。お側去らずの

御苦勞。今日お鷹野より直ぐお腰かけらる

野出頭今日も鷹野のお供にて。留守の屋敷

るとな。急なお成でさぞ取込。お料理組も

は大手の見付お鷹歸りの御入りとて。晝當

う出来たか早しく。我々も幸ひ非番。用

場より先案内給人若黨お出入の町人迄。降

あらば遠慮無用と挨拶口々。地座敷口より

つて湧いたる忙しさお成座敷の替へ疊。床

小姓山脇小七郎。生花隔を花盆に。花の露

に掛物臺子の埃掃いつ拭うつ。お庭の掃除

うく前髪さかりするくと立出で。これ

どつさくさ挽き薄茶挽く。茶道は引木に揉

はく日頃の御懇意。お揃ひなされての御

まる。けに誠忘れたりとよ。門の盛砂小

出で。主人郷左衛門さぞ満足。只今の殿様

者はツシ箒にもまる。臺所の板許には青

先代と違ひ。何かにつけて軽いお身持。壁

物の淵魚鳥の山。献立は三十九菜死ちた肴

に馬乗りかけし今日のお成。主人はお供我

さし大きにたまけりや何ぢや。殿の御

膳は一汁三菜と先達言ひ越す所。三汁九菜

の魚鳥盡し。身上を板許で切りはたく

か。此の献立は誰が指圖と。以の外の不

機嫌に、天窓も光りちらかせり。小七郎

しとやかに。憚りながら此の儀はお待中

の指圖ならず。二三日以前よりお長屋に返

留致し罷在る大阪の住人。靱油掛町八百屋

半兵衛と申して。元は御當地遠州生れ私と

は腹變りの兄。様子あつて五歳の時大阪へ

立越え。町人に奉公し商人の養子となり。

今の親は八百屋伊右衛門。實父山脇三左衛

門は私が生れし年相果て。當年十七年親の

墓への年忌参り。私事も懐しく。召使はる

る御主人へ御禮も申したしと。逗留致せし

兄半兵衛。商賣は八百屋殊更料理。幸と

今日のお献立を致させし不調法は私。兄へも

目出度き折柄御機嫌を直され。兄へもお會

ひ下されかしと恐れ入つたる謝罪に。主人

の顔も打解くれば。これ半兵衛殿よき折の

お目見え。お献立も仕直すため早うくと

呼立つる。聲を力に兄半兵衛魂は武士なれ

ど。三十餘年町人に業も姿も浸付きし。料

理榜を假初に御前といへば氣も聴れ。晝所

の板敷けつまづくやら滑るやら。はふく

這ひ出で手をつかへ。お國の御家風も存

ぜず。お献立を致せしは無調法。先達てお

使に一汁三菜との御意なれども。大阪藏屋

敷留守居がたの振舞でも随分軽いが二汁五

菜。結構には段々。朝鮮人の饗應御堂へも

雇はれ。七五三五々三。山影中納言の家の

切方。料理一通りは承り傳へし故。申して

もお大名の膳部。よもや一汁三菜とはお使

の聞き誤りと。いはれぬ念を入れ過ぎしは

猶不調法。お好みの一汁三菜。我等が手

際できりきりしやんと切立て炊立て。鹽梅

よしの御機嫌よき。御意を松茸つけ竹の子

生にかはらぬ仕様が秘密と。口も、料理

の鹽梅かけん。郷左衛門打笑ひ。山

脇三左衛門が仲なれば身が爲にも家來筋。

親の廟參奇特々々。幼少より他國に育ち。

當御代の御風儀知らぬは道理。料理は勿

論。衣類諸道具すべて無益の費えお嫌ひ。

上方でも風聞は無いか。去年十月高師山の

お狩場。身が相役佐野文太左。始めての御

供に縮緬の羽織を着めされたを。殿がじろ

おじろ御覽なされ。縮緬は風にしぶき面倒

な。重ねておけろ是をくれると御意なさ

れ。お手づから下された召替の木綿羽織。

さしもの文太左はつと赤面。其の後此の事

を工夫すれば。お供に参る文太左。縮緬の

羽織を着めされうやうがおりない。豫て文

太左にお謙し合せ。諸家中の見る前木綿羽

織を下されしは。美麗御停止とはなく。自

ら奢を止むる一家中への御意見。それを察

せぬ御家中の二番ばえ達の態を見よ。木挽

町堺町の役者から釣を取る衣紋付。己が身

の分限も知らず。一概に殿がお客いと

勿體ない蔭言。綾錦を召されてもお大名。

綿服を召されてもお大名。齋藤別當實盛

が最期に。錦の直垂は着たれども。源氏を

捨て平家へ返り忠の武士。心は汚れし塵穢
同然。又佐々木源藏は二君にも仕へず塵穢
の胃を据に結び。頼朝の御代を待ちしは心

の錦。今の武士の美麗を好むは實盛。佐々
木が遺風を芳しと思召す此の殿の御行跡
は。下を寛ろけ世を豊かに。寶賈を安くせ

ん爲の御儉約。武士は元より町人の其方人
等迄此の恩を忘るゝな。朝夕の御膳部も一

汁三菜。酒も數を定められ三盃限り。今日
の御饗應も龜相程御意に入る。献立も書く

に及ばず。コリヤ食は赤まじりの古臭いを
すつくりと炊かせ。かき立汁に小菜のうか

し。向づけはおろし大根鰯。焼物は室の
酢入。それも二つ切り。引いて古茄子の香

の物。扱平にはヲ、それよ。家來に持たせ
し山の芋。地是へくと呼出せば。五尺許り

の山の芋中間二人が指荷ひ。料理場の板敷
へンシ菰を放して昇き上ぐれば。半兵衛横

手を打ち扱ても副なし。御當地は御芋所か
一生の見始め。大阪で見世物に致したら

鯉金の攫み取り。第一お家の吉相なぞと申
すに。今日は殿のお成旦那の御出世追付

け。地山の芋から鰻にお成りなされうと。
輕薄ぬらくら口に鰻の油とろりと乗せかく

れば。國さればく今日の仕事。手下の百姓
殿のお成を聞付け。身が歸るさの道料理に

せよとてくれしは幸ひ。今日の御馳走こわ
一種。お身が自慢の庵丁随分切形を出かし

てくれ。頼むくと詞の下お成門の眞の
木の音。すは殿の御入りとひしめけば。

郷左衛門も次の間に袴改めお迎へとて出で
ければ。山脇小七岡大橋。ッ金田も續いて

急ぎ行く。半兵衛料理に心はせく打つたり
舞うたり身は一つ。薄刃押取り五尺の大芋

三寸ばかり切り調へ。つい皮むいてちよき
ちよきく。葛醬油の出し鹽梅煮かたは急

ぐ殿のお顔も拜みたし座敷口より差線け
ば。御城主も股引がけ上段に着き給ふ。一
間隔てて近習の人々鷹匠犬引列卒足輕。立
關の小庭に居餘り。臺所口を押通り長屋長

屋を休息場。奥には料理の勝手を急ぎ。主
郷左衛門殿の御膳目八分に持出づれば。〇

り思ひくりに給仕の作法。お汁がかはる
かへ食糞。初献の肴は鮪の足一切當の引重

箱。二献めも御機嫌よくお盃が替つて平の
蓋。有がたがための臺引物。定めを通り御

酒三献吸物は袋覗。思ひの外の無馳走に上
には御悦喜。ナホス納めの盃。坂部も丁ど下

されてッ首尾よく。御膳は取れにけり。
郷左衛門板許に立ちはだかり半兵衛を脱

め付け。今日の仕事は芋一種。でつかい
所をお目にかくるが御馳走。どのやうに切

ればとて五尺餘りの大芋。一寸足らずに切
碎く言語道斷。手打にする奴なれども他國

者といひお成の時節。地屋敷に叶はぬ出て
往せべいと。息結つたる腹立は、ッ詞すく

なに凄じし。半兵衛膝も動かさず。是は
旦那の御意とも覺えず。今日のお料理は隨
分切方に氣を付け。心一杯甘かせしと一分
一分

り。總じて貴人大人へは何に限らず斯様の珍しき物お目にかけてぬが料理の習ひ。大名高家は大様に。一度お目に觸れられては澤山に有る物と思召し。隣國のお出會にも。身が領内には珍しき山の芋有りなどと。お國自慢のお咄の上。ふと餘國より御所望の時跡へも先へも行かず。國中を尋ねても有合せず。自ら殿様を嘯つきにしてのける。そこを存じて常の如くの調味は。且那へ御奉公と存せしに。地御機嫌に違ひしは身の不仕合。如何やうとも御存分に遊ばせと。どこやら詞のひつばなし残る所が武士氣質。郷左衛門口あんごりム、。調こりや尤。イヤ尤。誤り申したく。其方が言ひ分真直に。地御前へ申すがまた御馳走。やれくくく。山の芋で足突いたと。フシとつと笑へば。はやお立ちとお供廻りが振出す毛鐘。臺笠立傘大鳥毛。乗物引馬嘶き立ち御城内迄お禮の御供。郷左衛門もお興に添ひ。暮れぬ間の御歸城と氣も夕陽の

三入、入日影。フシ座敷の仕舞は。地侍がた庭の締りは中間小者。役目々に立別る。臺所には半兵衛一人庖丁眞魚箸薄刃組板取り片付け。煙管くはへて吹く息に。フシ鐵拐が皺をのぼしけり。地二番ばえどもはらくと立寄り。拙者等は郷左衛門組下の弓役ども。お身は山脇小七郎の舎兄とな。早速の無心。弟の事を頼むも馬鹿らしけれど。前髪姿にしんぞ爪先よりぎり／＼迄打込み。毎日々々しづ心なき玉章。奉書の代も五百目ばかり。身上を紙に打込んでもつれない小七郎。兄貴是非所望申したこれ。軍右衛門が坐り申して手をつかへるこりやさ。拜み申すくれ申せと地たぐりか、れば甚藏逸平コリヤ半兵衛。調おと言つたらむつかしいぞ。外方にも惚れてがある。奉書代は愚かな事。君にか、つて一貫五百が外郎積んだ此の甚藏。弓矢八幡身にくれろイヤサ地此の逸平にくれろうと。耳際にかみ付く如く惡風吹きかけ眼も眩み。フシ前

後忘するばかりなり。煙管も放さず半兵衛大胡坐。御城下の習ひ衆道御法度。おといへば弟が首が御座らぬわいの。イヤサ當國は女の淫奔は下々迄御政道。衆道にはお構ひなし。三人の内どれへなりと。地魂すゑて返事せると。フシもやつく後に。小七郎是迄受けし文一抱へ半兵衛が前に置き。兄ぢや人の手前恥かしながら地かう。成る上は隠されず。數ならぬ私に御執心とは振袖の身の思ひ出。忝いは山々なれど。一人ならず彼方此方の文の數。無下に返すも情知らずと請取つては置きながら。一通も封を切らぬがいづれも様への立分。誰方に従ふ心もなし。調兄半兵衛の存じられし事でもなし。調此の文封のまに御返辨。思し切つて下されと。男色立抜く。フシ詞の優しさ。地其の意氣方に猶なづむとしみたるう取廻せば。調半兵衛見兼ねてハテサテ聞分けない方々。形こそ町人心は侍。拙者が目利で惚れての内へやりませうコリヤ。小

七郎。地装束せいと心を目にて知らすれ

ばかりの戀慕でなく。未來迄も小七郎不便

郎も引寄せてすはやと見えし刀の中。半兵

ば。あつと心得領きて オトリ部屋に。入れ

と思召すならば此の場にて刺違へ。人の構

衛飛入りコリヤ。狂氣したか小一兵衛と二

ば半兵衛多くの文の上書読み。ハア、皆

はぬ未來での念者若衆。サア弟をやる地誰

人を左右へ引分くる。コレサ上方のお且

各の名書き。此の一括の上書に。小一兵衛

方なりとも兄弟の契約々と三人を睨付く

那。鹽味噲汁の御恩にかへたお若衆。爰で

とは誰が事御存じないかと問ひければ。三

る。思ひがけなき拔身の盃。死装束に喫驚

死なねば心が見えませぬ。是非に地死

人とも口を揃へ。其の小一めは此の屋敷の

してへん。くくと咳に紛らし身せせり

なせて下されと立上るを引伏せ。男氣見

中間。へ、エ慮外な下司めが。地やりを

し。フシぐつと言ひ手もなかりけり。道具

えた。小七郎に誠の惚れ手は其方一人。争

つたわとえせ笑ふ。イヤさうでござら

御門脇の長屋より紺のだいなし。裾七の圖

ふ者があつてこそ大事の弟を地殺さうす

ぬ。此の道に高下はない。其の小一兵衛も

迄引つ褰け一振り。振つて振出すは。戀に

れ。争ひ手の無い若衆山脇半兵衛が挨拶。

呼出し並べて置いて念者に頼む。イヤく

こいとや小一兵衛三人の鼻先。尻つき出し

向後兄分に頼んだぞハ、はつと悦び小一

下司め。身などと同座に置く奴でない。地

てフシかつ蹲ひ。兄御半兵衛様のお手前

兵衛。お侍方と同座のならぬ奴めが。武

殊に留守やら面も見ず無用々々といふ所

も。シャお恥しいべいながら。小七様にと

士に劣らぬ魂ゆゑ。結構なお若衆の兄様と

へ。山脇小七郎白小袖に淺黄上下。フシ覺

んと打込み二合半の盛切お臺。喉につまつ

は忝いく冥加ない。手付にちよつとほと

悟極めて座に着けば。半兵衛は取敢ず香臺

てぎつちく辛いこんでござりまする。今

くろしい事御免く。半兵衛様も氣をお通

の三方に。拔身二振弟の前に置き。惚れ

日君がお情をつん出して。未來ではやつが

しと地べつたり抱付く紺のだいなし白無垢

手は四人惚れられ手は第一人。何方へ進ぜ

れめを。お念者になさるべいと。有難

に。フシ黒白粹の兄弟なり。岡軍右衛門

でも残る三人の恨み。此の兄は他國住居行

いやら。悲しいやら。セ、くくく。

は法界悟氣くわつとせき。コリヤ下郎め。地

く末も氣遣ひ。いやと言はさぬ御所望。歴

唐辛子を五つ六つ喰つても。こんな熱い涙

見苦しい置きをれと肩を取つて引退くれ

歴のお侍町人風情に手を下けてのお頼み退

は。出ませぬでござりまするで。ござりま

ば。コリヤ何なさる。ム、聞えた。お

引ならず。弟に覺悟させての死装束。表面

すると。白刃を取つて立寄れば。小七

取持の御酒が過ぎたか。ム、合點々々。流

石二腰のお心掛は格別。柔術の稽古遊ばす

な。不調法ながら地お相手と座興にもてなし。

すつと寄つて一當あて引つかづいてうんと投げ。ハ、く、く、く、く、こりや鹿相

でござりまするで。フシごはりますると空

とほけ。甚蔵逸平堪られず一度に寄つて胸

ぐら掴み。ぞんざいなる小丁稚め傍輩をな

ぜ投げた。返報に砂嚙らせんと引立つる。

調扱々お心掛のよい。お前方もこりや柔術

か。どりや地お相手と立つ拍子。二人が息

合はつたくと蹴返せば板敷より真逆様。

詞ハ、く、く、く、こりや又龜相。地御免

御免といふを機三人ぐすく起上り。エ、

どんな所へ給仕に來て酒盛つて尻踏まれた

と。地袴の腰に痛い顔。フシ休へてこそは

歸りけれ。地半兵衛ぞくく小氣味よく。

扱も手際小一兵衛。我は他國便なき弟が事

頼むく。今日料理の御褒美に。二人

が事を旦那へ訴訟。地權柄晴れて念頃さす

る其の仲立は半兵衛が歌八百萬代の神かけ

て結ぶ。契りぞ 三重

中 之 卷

歌五月雨程戀ひ慕はれて。今は秋田の落し

水。軒の玉水とくく。ござれしけく。ご

ざれば。名の立つにナホス玉水近き。山城

の。村は上田に家富みて。庄屋に並ぶ茅屋

根も内暖かに下女。並んでつむぐフシ綿車。

地手廻りもよくいくはへか庭に五つの穀。

積む蓬萊の島田氏。平右衛門といふ大百

姓。妻は去年の秋霧と消えても残る娘二

人。總領かるに入袈を鳥飼より呼び迎へ。

妹ちよも大阪に歴としたる袈取つて。身の

入前は上田の田島の世話をやきやめば。萬

事限りの俄病。姉のおかるは側離れず臺所

には女子ども。何と今朝から仕事のはか

もいたではないか。地ちと休まうお竹お鍋と

呼びつれて。フシ思ひくに立出づる。地親

のすやく、假寐の隙を覗く女房は。心忙し

く奥より立出で。これく臺所に人が一

人も無い。連合平六殿は淀川筋。新田開き

の御訴訟に。大事の病人振捨てての京上

り。男どもは皆野へ行くエ、憎い女子ど

も。我が見る前ではちよびかはして。ちよ

つと立てば早どこへ。大切な主の煩ひ樂一

つ暖めうともせぬ。地下々には何が成る圍

爐裏の下焚き付けぬか。次郎よくと呼び

廻す門の口。駕籠昇きすゑて申しく。

大阪の新敷八百屋伊右衛門様からと。地駕

籠の戸明くれば打萎れ。フシ目許しほよる。

縮緬の。二重廻りの抱へ帯。フシ涙の色に染

めかへて。地泣くく出づれば駕籠の者。

確かにお届け申したと。フシ言ひ捨て歸るも

足早なり。地親の家さへ女氣の。敷居も高

く越え兼ねて佇む有様姉は見付け。詞ヤア

おちよおちやつたか。定めて御病氣のお見

舞ならめ。ようこそく何故駕籠の衆止め

やらぬ。除所外でもあるやうに隔心かまし

い。酒一つ進せて往なしやいの。地それ呼

ば共にかかれて。詞ヲ、道理々々疾う知

申

らせんと思ひしに。此の病では死なぬ。氣の取り悪い舅姑持つたおちよ。掣半兵衛も忙しい時分。聞いたりとも自由に来る事は成るまい。案じさするも不便沙汰するなどの。病人の氣にも逆はれず。地高麗橋の伯母様常盤町へも知らせぬ。コレ氣遣しやんな京の御典藥に變へてからめつきりと薬も廻り。今朝も粥を中がさに三よそひ。病は請取つて直すとのお醫者様の請合は。本復も同じ事。地其方の顔御覽なされたら。いよく父様の病はすつべり直りう。嬉しいくお目にかゝりやとありければ。エ、父様はお煩ひか知らなんだ。何時からの事でござんする。ヤ何ぢやお煩ひ知らぬか。そんなら其方何しに來た。何悲しうて泣くぞ。地ア恥かしや又去られてと。ステ顔押し隠し咽び入る。姉も驚く顔に血を上げ。同なうおちよ。五度三度の掣入嫁入も世にある習ひとは言ひながら。悪い事は手本にならぬ。恥かしい恥かしいと口

でいふばかりが恥を知つたと言はれうか。地をなたもかるく三度の嫁入。尤始めの男道修町伏見屋の太兵衛殿。心不情に身代をもち崩し。佇みもないやうに成り果て飽かぬ別れ。其の次は死別れ互に難はなけれども。人人は其方の辛抱が無い故に。去られたくとも非難つけ。此の度の嫁入も追出さるゝに間はあるまい。忘れても島田平右衛門が娘の風下に居るなど。娘持つた人々は密合茶呑咄にも其方の噂。ま一度戻つては親兄弟。地人中へ顔が出されぬとは知り抜いて。火に入り骨を碎かるゝとも歸るまい。ヲ、必ず去られて戻るなど。念に念を番うた今度の嫁入。よう戻りやつた父様お聞きなされたら。お悦びなされうぞお顔見せる折があらう。必ず聲高に物しやんな。同して半兵衛が暇の狀取つて戻りやつたか。いや跡の月半兵衛殿。父御の十七年の弔ひの爲。生れ故郷遠州の濱松へ。戻り次第道具に添へ暇の狀は跡から。先づ往ねと譯も

言はず。地お腹に四月唯もない身を。姑御が手を取つて駕籠に引きずり乗せ。酷い辛いとばかりにて。ステ歎くを見れば痛々しく。子の有るものを夫の留守隙くれる姑。心に一物あるわいの。同伯母掣ながら其方の親分。高麗橋貳丁目川崎屋源兵衛殿差置いて。直に爰へ突付ける仕方も憎し。よいくこちの人が京からの歸りを待つて詰開かせ。大抵で暇は取らぬ。地とはいへ世上の女夫仲。去るといふ事誰こしらへ憂い目をさせる可愛やと。歎けばわつと泣出す聲。ア高い障子の彼方と、様の寢入りばな。泣くなくと言ひつゝも。傳ふ涙の血筋とて親は泣き寄り。ヲ哀れさよ。地平右殿御氣色今日は如何とつと入る。同じ村の金藏おちよはちやつと姉の陰。見付けられじと身を隠せば。同ア、隠れまい隠れまい。たつた今堤の茶屋で。大阪へ戻り駕籠の咄で聞いた。おちよ殿目出たい。去られて戻らしやつたけなと。地口も氣儘の

途方なし。おかるははつと餘所よりも親の
聞く耳憚りて。金藏様嗜ましやんせ。舞
はなし聲びくに言うても濟む事。ちよは去
られは致しませぬ。親の病氣を見舞の戻
り。地奥にはと様すやくと寝てござ
る。目を覺して下さんすな。低うく同じ
くは往んで貰ひ度いと。氣の毒がる程猶聲
高。親に寢てか面白いなんほ隠しても慥
な事聞いてゐます。おちよ殿幾度でも去ら
れさつしやれ。あれこれの聲達が踏み度け
た田地でも。百姓の女房には大事ない。俺
俺が持つて一夜さも淋しいめはさせまい。
去られて戻つた悲しいと氣を腐らし。必ず
女房振損うてもらふまい。去る春貰ひか
けた時。俺が方へござればよいに。惚れか
かつた一念脇に足は止らぬ筈。入るまい入
るまい戻るといふも。此の鼻に縁が深いか
らぢや。親仁殿にいひ込んで今日からでも
我等請込む。地師御大事にかけてもらひま
しよと。喚けば二人は死に入るばかり。冷
す心の奥に手を打ち。かるよくあいよく
あい。南無三親仁起きられた。金藏が見
舞うたというて下され。地又明日御見舞申
さうと歸ればかるは腹も立ち。これよく
去なすとちよをお貰ひなされぬか。地いや
いやいうても大事の縁組。日を見て申し出
さうと、フシへらず口して立歸る。地と様
お目が覺めたかと。姉が障子を明くる跡よ
りちよもおづく差覗けば。夜着に凭れて
起臥も。スエテ惱み苦しき老の坂。誰狩りす
とはなけれども。落ちくる肉に顔荒れてッ
見交す親の顔と顔。地堪へ兼ねてなうと
と様。お藥あがつてま一度。達者に成つて
下さんせと。思はず知らず聲立ててさめざ
め。歎き伏し轉ぶ。父も見る目に涙ぐみ大
事ないつつと来い。つつと寄れと腰近く。
又去られて戻つたな。子に運ぶ親の心る
ながら千里萬里も行く。ましてや一つ家の
内。寢ても寝られず最前より何事も皆聞き
しぞ。地そも我ながら斯くも心の變る物
か。五十といふ年の内は行歩心に任せずな
がら。心は若かりし昔に變らず。氣も強く
義理にも引かれ。地己れ重ねて去られたら
ば。顔も見るまじ物いふまじとの我もあり
しが。六十に足踏ん込んで年ばかり寄る
でなく。月も寄り日も寄つて病には絡まる
る。地身の衰ふる程彌増しに案じらるゝは
子の身の上。三度は愚か百度千度去られて
も。去らるゝに定まりし前世の約束と思ひ
諦むれば。悔みもせぬ憎うもない。笑ふ人
は笑ひもせよ。譏らば譏れ指もさせ。子の
不便さには代へぬぞと老の。縁言息弱り。
半兵衛めは遠州へうせて留守の内とな。
其の留守合點。萬一うせたりとも物いふな
顔も見な。彼奴が身上百倍の所へ嫁入さ
せる。苦に持つて煩ふな。地なう姉下々は
野へ行つらん。茶沸いてちよめに中食させ
てたもれやと。餘念なき父の顔。姉は悦び
コレおちよ。案じたとつ様の御機嫌日本
一。お側離れず御介抱申しや。地胸が開け

たと。障子を引立て、ギンオクリ勝手へ。

出づる。フシ折こそあれ。地門に物まう頼みませう。何方どこと答へ入るを見ればちよの夫の半兵衛。扱つかこそ縁を切りに來たと。思ふ心に口どまくれ。去狀様ようござつたと。

いへども何の氣も付かず。旅出立のまゝ笠取つて沓くつに草鞋の紐。心も解けてヤおかる様。何方どこも變る事あるまい。國許へ參る時分は事急にて知らせも致さず。氣のつかぬ親ども留守の内にもさぞ御無沙汰。拙者も無事に遠州より只今罷歸ります。フウ

それはな。御奇特にようお歸りなさるゝと。地顔を背けて鼻あしらひ。男ども女ども誰ぞお茶でも上げぬかと。内にゐぬ人呼立ててむやくし顔の色合を。見て取りながら半兵衛。立ちも立たれず仔細は知らず。互の心隔ての障子さつと明け。姉様お樂暖めてと出づるは女房ヤアおちよ。地爰に居るかを聞捨てて物をも言はずつと入り。障子をはたとフシ引立てたり。おおかる様

あれ女房。いつから爰に地何故物は申さぬと騒げども。調物いはぬ譯聞き度くばこなたの心にお問ひなされ。人の知つた事のやうに。ハ、ハ、ハ、可笑しい事ではあると地そら笑ひ取つてもつかれず。ムウムウとばかり差俯向きフシと胸。突くより詞なし。奥には親の息苦いきし聲。日夜短かで日の永いは老人の身によけれど。それも息災でかけ廻る時の事。病みほうけて日の長いは。扱々退屈で暮し兼ねる。ちよよ棚な本下して何なりとも讀んで聞かせ。かるは何處どこに來て聞かぬか。我が我が伽あませぬかうせぬかと。せはしく老の氣の肯立あま。あいゝ爰に仕事しながら障子隔てて聞きますと。流石半兵衛を捨てても立たれず障子の側に立寄れば。ヤ親仁様御病氣か。容態見たしといはんとせしが。ぶあしらひなる氣をかねて。詞を止め折を待ちフシ共にすり寄り聞き居たり。ちよは數多の本取出し伊勢物語いせ塵劫記ちやく。身と、様の側にあるまい網島の心中

もござんする。徒然草平家物語なうと、様。どの本がよからうぞ。姉が讀みさいた平家物語。祇王が段を聞かう讀みやれ。誠に紙を附けた所があると押開き。母の刀自ら泣くゝ又教訓しけるは。天が下に住まぬ者鬼もかうも入道の仰は背くまじき事であるぞ。千年萬年と契るともやがて別るゝ仲もあり。あからさまとは思へども存らへ果つる事もあり。世に定めなき物は男女たにの習ひなり。地ほんにさうちやと讀みさして。我が身にあたるフシ憂き涙とゞめ。兼ねてぞ泣きわたる。地父も不便に目をしばゝ。昔も今も人の氣の。移り易き世上の習ひ。コレ姉も聞け。平家物語をちよが身に引較べていふ時は。清盛入道は八百屋半兵衛。祇王はちよが身の上よ。その清盛が心變つて追出す。エ、憎や清盛去年掣ひ入せし折から。不調法な娘を進上致した。氣に入らぬ事あらば打殿うちだにき縛り括つても直させ。末々迄も見捨てず添うて下されかし。此の

度共に三度の嫁入。在所は一所どころに
て。又歸つては平右衛門再び人中へ面が
されぬ。娘は氣に入らずとも我を不便と面
倒見て必ず去つて給はるな。ヲ、去るまい
御臨終の折からは。先興は平六殿。後
興は此の半兵衛。眞實の子を持つたと思召
せ。今こそ町人八百屋の半兵衛。元は遠州
濱松にて山脇三左衛門が倅。武士異利商賣
異利。ちよは去らぬ氣遣するな。ア、忝い
と手をつき。地頭代官の其の外に。一生下
けぬ頭を下けし互の契約。詞物忘れする老
の身にも。其の時の嬉しさは骨身に浸みて
忘れぬもの。若い形して忘れしか忘れぬ證
據。其の身は實父の弔ひにかこつけ。遠
州へ出かけし其の跡で姑に追出させ。養
子の親に我が罪を塗付くる不孝者。義理も
法も知つた奴か。地あれが何の武士の果。
鱗節の削り屑。人でなしめに縁組んであた
ら娘を捨てたな。ろくに吟味もせなんだか
と死んだ母がああ世から。恨みめされう口
惜しいと憤み深き堅親仁。悪口交りの口説
き泣二人の娘も正體涙。兎角男に縁の無い
生れ性かとはかりにて。スエテ聲も惜まざ泣
きるたり。地扱は女房去られて爰へ戻つた
かと。始めて驚く半兵衛胸に磐石据ゑたる
如く。呆れ返つて涙も出でず暫し詞もなか
りしが。詞エ、情ない女房。たとへ一言一
宿のつき合にも。人の心は知るゝもの。地
まして足かけ二年の馴染。子迄なしたる夫
の心。知つても言譯してくれぬか。親仁様
の御立腹申し開くは知つたれども。詞我が
罪を養ひ親に塗り付くる。不孝者との一言
からは。ゆめく存ぜぬ。我等去りは致さ
ぬと申しわくる程不孝の上塗り。親仁様に
つがひし詞遠へぬ武士の性根を見せる。地
見て疑を暗れ給へとすばと引抜く脇差よ
り。おかるは早く縋り付きちよも驚きなう
悲しや。こな様に恨みはないと障子引明け
走り寄り。とめてもとまらぬ男の力父様頼
み上げますと。騒げど騒がぬ平右衛門。詞お
身が居るとは知つての當て言。耳に止つて
の自害か。ヲ、よい分別。自害して死んだ
らばあれ見よ八百屋伊右衛門夫婦。嫁を憎
んで去りしゆ急子は面うち自害せしと。
養子に惡名難をつけ。口々に取沙汰せば手
柄々々。地とめるな娘存分に自害めされ見
物せんとの一言に孝心深き肝を拉がれ。ハ
アさうぢや誤つた眞平と。スエテ額を摺り着
け身を悔み。詞然らば御暇ちよも同道いざ
お立ちやれ。エイ矢張り私を女房に持つて
下さんすか。ヲ、たとへ死んでも身體も戻
さぬ。盡未來迄女夫々々。ア、忝い地父様
姉様も悦んで下さんせと。はや締め直す抱
へ帯先をたぐつてにじり寄り。父ははらは
ら涙に咽び。詞半兵衛これ見や此のしどな
さ。歸らんといふ嬉しさに。親の病をか
も言はず。地悦ぶ顔を見る親の。心の内の
嬉しさを。叶は、見せて禮言ひ度し。とり
しめの無、愚者尹右殿夫婦の氣には入る
まい。頼むは其方の心一つ親は老病明日知

らず。黄泉の底の底迄も心にかゝるはちよ一人。明日が日眼塞ぐとも。姉夫婦にきつと言ひつけ。二十十の金の取遣り。いつ何時でも事缺かせぬ。随分商賣手廣くして娘が事を、フシ頼み入る。地契約の盃せん銚子

銚子。姉よ酒を切らせしか親子の仲に遠慮

は無い。酒と思ふ心が酒爛鍋に水もて来いと。盃の出る間も焦るゝは子ゆゑの闇。引

受けくすつとほし。半兵衛差さう親子

夫婦が水盃。地差いつ差されつ汲めども盡

きず飲めども酔はぬ水酒盛。不便と思ふ親

の氣は、フシ餘りて色に出でにける。地命が

あらば又逢はう死なば親子の末期の水。未

來は八功德池の水此の世に思ひ置く事無

い。二人ながらお往にやれく。さらばと

夜着に打凭れ再び詞も交されぬ。地親親の

心に身を恥ぢて姉につどく言ひ交し。思

ひを述べて立出づる。フシ暫しと父は。起

上り。姉なう重ねて戻らぬため。祝うて

内で門火焚け。忌ましくしいとは思へども

親に従ふ焚火の煙。目出たう爰から焚きますと。庭にこがるゝ下もえの果は夫婦が無常の煙。灰に成つても歸るなと其の一言を此の世の名残止る名残行く名残長き。名残と三重

下之卷

夏も来て。フシ青物見世に。水乾く。筵庇によけられし。日蔭のちよが舅の家は新

鞭。油かけ町八百屋伊右衛門。浄土宗の願

ひ手了海坊の談義に打込み。開帳回向の世

話やき仲間。見世は半兵衛に打任せ大阪中

の寺狂ひ。女房は内外の世話に五つも年ふ

けて。朝から晩迄氣は苛立て。此の半兵

衛は藏にべらく何してゐやる。見世の賣

物がしなびる。ヤイ松め。きりくくと水打

ちをろ。コリヤさんよ。糊かひ物が干上が

ろがな。とりへて疊んで打盤出してちよき

ちよきと打て。ヤ其のちよきくで夕飯の

おねばきざめ。コリヤ松よ。今日は五日宵

庚申甲子が近い。二股六根のけて置く。地

ソレさんよ茶釜の下が燃え出ると。商賣が八百屋とて八百色程言ひ付くる。口せかせかとせはしきは、フシ大晦日の生れかや。叔母に似ぬ甥の太兵衛が市通ひ。走りの竹の子片荷には獨活生姜青山椒白瓜二つ。歌

これはさつても早い事でごんすよの。おれ

が戻るは。ても遅い事でごんすよの。コ

リヤ野良坊。今朝卯の刻から内を出て。何

時ぢやと思ふ晝下り。何處で鼻毛をよまれ

てゐた。旦那衆の誂へ物日覆ひしてさへ傷

む時。高い物を天日干し。地商賣の妨ぐ

らはせ魂に覚えさせんと取付けば。半兵衛

走り出で母ぢや人のがこりや尤。コレ太

兵衛。どこにのらくやつてゐた。枉町の

笹屋から竹の子取りに矢の使。阿波座堀の

丹波屋から栗おこせというてくる。朝倉屋

からは青山椒内には切れる返事に困つた。

大儀ながら母ぢや人の機嫌直し。つい一走

廻つておぢや。ハテ私ぢやとて何の悪い所

込まれ二つ三つ話したばかり。それも外の事でござらぬ。此方に誰やら逢ひ度いとて。今朝から爰に待つてゐるといつてくれとの言傳。地私や得意を廻つて來う此方もちよつと行かしやれと。誂へ物を取捕へッシ荷拵へして出でて行く。半兵衛は山城屋と聞くよりおちよが來たである。氣どられまいと空とほけ。ハア山城屋からは何の用。どりや一寸いてかうと走り出づるをむすど捕へ。喘息子殿こりやどこへ。イヤ山城屋から逢ひ度いとテ、その山城屋合點。成りませぬ。アノぬつけりとした顔わいの。こちと夫婦は何にも知らぬと思つてか。氣に入らぬで去なした嫁を。遠州戻りに在所よりよう咬へて戻つたな。常盤町の從弟が所に預けて置き。商賣にかこつけ。間がな隙がな女夫こつてり俺が知らぬでおこかいの。さぞ俺が事譏りやつつろ。十五年世話にした。親の嫌ふ女房に随分と孝行つくし。親には不孝つくしや。地恩知らず

めと疊叩いて喚きゐる所へ。青布子の西念坊案内なしにすつと通り。熊野屋の權右様から先達のお約束。宗味が刻鐘の開眼租相な非時致します。講中皆お揃ひ旦那寺もとうお出で。御夫婦ながら地只今と。言ひ捨て歸るそ、くさ坊主。フシ未來頼むはあぶなもろ。親仁殿。熊野屋から呼びに來た早よ行かつしやれ俺や行かぬ。地きりくさしやれとつこと聲。親伊右衛門は後生一遍。ハレ喚何を喧しい。又してもく。半兵衛さへ見れば敵のやうにいふ大ぢや。世間する若い者呼びに來まいものでもない。少々の事は聞き通しにしやいの。ソレ其の結構過ぎたから。親を阿呆にしるるわいの。現在俺が甥の太兵衛を差置き。赤の他人の此ののら殿に。家屋敷やる此の母邪は少しも無い。コレ喚。それは誰も知つた事今更檢べる事かいの。そのよな腹の立つ時は念佛が樂ぢや。兎角如來の御方便。修羅燃す其方を呼びに來るも彌陀

如來參るこちとも彌陀如來。地機嫌直しやと宥むれば。イヤこち女夫が斗いて。跡へおちよを呼入れ。留守の間でたへさす事は成りませぬ。此方一人參つて。私は俄に目が眩うたとなりと頓死したとなりと間に合ひにやらつしやれ。コレ喚。たつた今西念坊が見ていんだわいの。此の伊右衛門に嘘つけかア勿體ない妄語戒。此の中さるお寺で五戒の割口説聽聞した。三百戒五百戒もつまる所は赤貝に止るとのお談議。半兵衛が叱らるゝも貝の業。地其方に俺が意見するも貝の業。一蓮託生の園のお同行と。フシぢやれて機嫌を取りければ。そんならマア此方參らしやれ。此の様な嗔恚の燃える時に念佛申せば地咽にすくく立つやうな。心靜めて跡から參らう。エ、かて、加へてあた鈍な念佛講。こんな時はめかり利かして延したがよいわいの。ほんにこちの同行に。氣轉の利いたが一人も無い。と怖い目知らぬ我儘たらん。テ

ヲそんなら先へ行く跡からおぢや。御佛法と萱屋の雨は出でて聞けと。外へ出れば又有難い事も聞く。此の度生玉大寶寺の開帳に築山を飾られたも。筑後の川中島の四段

目から出た事ぢやけな。こんな事も出にや聞かれぬ。地ア、有難い南無阿彌陀佛と。フシ輪數珠くりく出でにけり。地半兵衛一

言の答もせず。ステ涙にくれてゐたりしが顔振上げ。詞申し母じや人。今めかしい申し事ながら。武士の釜の水で育ちし此の半

兵衛。廿二年から御面倒に預り。一人の甥御を差置き家屋敷商賣とも。私へお譲り

なさるゝ御高恩。肝に應へて空にも存せぬ。御恩の母の氣に入らぬ女房なれば。私

が離別致してこそ孝行も立ち世間も立つ。一所に此の度國許の留守の間に。八百屋半兵

衛が母が鍼を憎んで姑去りにしたと沙汰あつては。萬々ちよめが悪いになされま

せ。判官最良の世の中お前の名ほか出ませぬ。母の悪名を立て、若い者が人中へ面が

出されませうか。親仁様に而目先はず

爰が一つの御訴訟。少しの間と思召し蟲を

殺し。美しうちよめをお入れなされ。其の上にて私が。物の見事に去狀書いて暇やり

ます。ホ、そこが男のかうけん。貴人高位の娘でも夫が去るに何と申す。時にはちよ

めが姑への恨みもなくお前を慈悲ちやと言はせ度い。十六年以來たつた一度の御訴訟

も。如何なる跡のとひ弔ひ百萬遍の御回向より。聞入れたとの御一言。智識長老のお

十念を授かる心とばかりにて。女房の親と我が親と世間の義理と恩愛と。三筋四筋の

涙の絲たぐり出すが如くなり。母はいやりと笑顔して。思ひ合うた夫婦合。誠

らしうは思はねど嘘に涙は出ぬもの。眞實去るが定ちやの。ハテお前を誦す程なれば

此の御訴訟は申しませぬ。ヲ、嬉しいく。俺も鬼には成りとむない。必ず去りやや。

間に合いうてだましやれば。コレ此の母が

嚙吹を。出刃庖丁でちよいぢやぞや。母親すか女房去るか。それからは其方の勝手次第。ア、さらりつと穢土の苦が抜けた。此の世からの生佛とは俺が事。足輕う非時に参りましょ。地ちや未來まで退き去りせぬ閨の同行が。さこそ待ちや焦れて。南無阿彌陀佛く。さんよ其の形でつい供せい。ア南無阿彌陀。松よ。又見世の吊し喰ふな。アなまみだ。地南無阿彌陀佛に取交せて。オトリぶつくく言うてぞ出でにける。フおちよがかさなる。五月の重き身ながら足許も。手もかろくと帶の下。ホッ

勞させた。今から往なそのいの字も言ふまいと心誓文立てた。娘は持たず天にも地にもたつた一人の花燼。末期の水取らるゝも骨拾はるゝも其方。随分孝行にしてたも。其方も俺がいとしがら。今お念佛に參るその内に早う戻つて。後に逢はう早うくととんと桶な物打明けたやうなお心。皆こな様の言ひなし故と。ほんに男の御息は戴いてるてもあきはな。松よ久しいな。最早どこも蚊があるに。女房主がなければまだ蚊帳の吊手もなし。アノさんが居睡では拾どもの洗濯も出来まい此の戸棚の埃わいの。奥の傷も未だ塞がず。香の物も見廻たし地何からせうやら氣がうろつく。みつけた所にて見よとんと坐りし茶釜の前。湯を沸かして水に成る。フシ末知らぬこそ果敢なけれ。半兵衛とかうの挨拶せず。コリヤ松よ。只るすとも藏へいて地椎茸よれと人をのけ。おちよが顔をつくぐと見て涙ぐみ。コエ、可愛や。利發のやうでも女

心。母の詞を眞實と思ふか。いやる事が皆嘘ぢや。さり乍ら昨日もくれぐいふ通り。佛法の端も聞入れ物の慈悲も知つたり。我が甥を差退け他人の身どもに。諸式護る心からは根から歪まぬ是證據。人には合縁奇縁血を分けた親子でも中の悪いがあるもの。乗合舟の見ず知らずにも。可愛らしいと思ふ人もあり。人界の習はしかうしいもの。いとしほなげに根からの悪人でもない母を。其方故に邪見者と言はせては。女夫の者が後生も悪い。母の機嫌よう一旦呼返し。改めて俺が手から去る筈ぢや。エイ。すりやどうでも去らるゝか。ハテ肝潰す事かいの。死ぬるは二人が豫ての覺悟。養ひ親に贊もつかず在所の理。遺恨もなく。エ、流石ぢや。見事に死んだと。未練者の名を取るまいため。母に向ひなんほの詞を盡したと思やるぞ。書置も認め死装束脇指も。荒布の荷へ巻込み。此の世の心がかりは微塵程もなければ。金に詰つて死ぬる心中と。一口に言はれうかと。地是が一つの氣がかりとわつと泣けばわつと泣き。こなさんの孝行の道さへ立てば。私も心は残らぬと。夫婦手を取り縋り寄り伏ししづ。むこそ道理なれ。母は念佛回向よ。娘女夫の願以此功德氣がかり。餘所にゆるりとるる空も見世さし頃によつと歸り。舞なうおちよ戻りやつたかさつきにも言ふ通り。ちつとした料簡違ひで物思はせたいとしやの。本の生如來が見たくば俺ぢやと思や。長うもない浮世に。酷い辛いめ見て何にせうなういややの。コリヤ半兵衛。走りの出刃庖丁よう研がして置いたぞや。ちよいと觸つても廻ぢやぞ。ア南無阿彌陀佛。地くと半兵衛に合圖の詞。娘は知らぬと思ひ込む。フシ是ばつかりは佛なり。女夫は機嫌顔。見れば此の世の本望と。思へど寂は雨と降る。フシ涙隠すぞ哀れなる。ココレ半兵衛何も忘れた事は無い。日の長い時はえて物忘れするものぢや

よう思ひ出しや。おちよ泣かずと爰へおじやいの。まだ俺が怖いか。地爰へくと猫なで聲。アイくお側へ参りますと。立寄らんとする所を半兵衛取つて突退け。調女房ばかりは親のまゝにもならぬ。身が氣に入らぬ。去つたく出でうせい。コリヤさんも丁稚もよう聞け。半兵衛が女房去つたぞ。向ひ隣町内でも。母の浮名を立てたらば聞く事でない。地うろくせずと出ていせいと。ステテ眞顔に睨む目に涙。調コレ嫁御おりや去らぬぞや。親のまゝにもならぬは女夫是非が無い。地俺を恨みと思やるなといへども何の返答も。泣入りくしやくり泣き。調ム、其の涙は、まだ母に恨みがありさうな。有るならいや聞きませう。イエエ。く。お慈悲深い姑御に。地何の。くと詞ばかりにてかつばと伏して。泣きゐたり。調ヲ、汝がいふ迄ない。母ぢや人に何の恨み。地口手間入れる面倒など。小腕取つて門口に引出す此の身も遂に行く。

後にくと嘯きて目ませに宿の。フシ名残の涙。弱る心を見られじと門口びつしやり見世ぐわつたり。鳴るは六つか早初夜か。時も時分も六々に。胸はわけなき五々八々の生き別れ流石の母も挨拶なく。お上を立つて奥の間の罪亡しの鉦の聲。善惡照らす御燈の火を見るよりも居睡る下女。外に見るめも荒布の束中に隠せし一尺四寸。是が冥途の案内者魂こむる書置箱。地獄へ墮ちるか極樂か。末は白茶の死装束。くるく包む毛氈も早紅の血を見れば。死に損ひはせまいぞと一心はすわれども。暖簾一重は彼方にはすゝどき母の鉦の聲。胸にこたへて身も顛ひ。踏みど覚えぬさし足に。鏝はづす手もわななくそつと出でたる。門口に。調イヤアおちよかおいの。サア罫の口を遁れた。地サアおぢやと手を引けば。調マア待つて下さんせ。生中一度戻つて。こなさまの口から。退くぞ去るぞと言はれては未來迄の氣がかり。此の門口でたつた一言去らぬというて下さんせ。ハテ愚痴な事ばかり。今宵は五日宵庚申。女夫連で此の家を去ると思へばよいわいの。ほんにさうぢや手に手を取つて此の世を去る。輪廻を去る迷ひ去る。地今日は最期の羊の歩み。足に任せて 三重

道行思ひの短夜

歌名残も夏の薄衣。鶯の巢にフシ育てられ。子で子にならぬ杜鵑。我も二八の年月を。養ひ親に育てられ。子で子にならず振捨てて死に行く身は人ならぬ。死出の田長か。フシ杜鵑。同じたくひの。女夫つれ小オクリ肩に。かけたる毛氈は啼く音血を吐く姿かや。覺悟極めし足許も。ホフシ影ほのくらき薄曇り。卯月五日の宵庚申。死なば一所と契りたる。其の一言は庚申。ステテ参りの人に打紛れ。フシオクリ忍びへ出づるも商賣の八百や萬を一文字に。半兵衛といふ名にも似ず。長地只ねぶかくも思ひつむ

若な心のつきつめて詞の義理に生薑や。智者は惑はず。フシ勇者は恐れぬ。生れつき。流石は武士の。フシ胤ぞかし。地ちよも今度が三度めの嫁菜さかりもひねくれて。諸事をこまかな芥子辛子人のいふ事木耳や。スエテ夫の親を手にさゝけ。フシ。晝夜孝行つく。く。し。仰背かぬ給仕へ。氣のとつさかな。姑に。せりく。いぢりたでられて。スエテ命もなしやありのみの。谷川ふりに身を投けう。今日甘海苔にならうかと心は有頂寒天の。いつわつさびとしもせねば。フシ斯く成る筈でござんせう。スエテ何と生薑の身の果を。説いて。返ら。ぬ。水露の。姑去りて殺したと。無支悪名つけて世の人のわらひませうがお笑止と。悔めば夫は芋莖の涙。地なう其方さへ其の如く悔んでたもるに此の半兵衛。年頃日頃の御高思送らで死ぬるは人の屑。罰をかぶらん恐ろしと。酸漿程な血の涙はらく。こほせば走り寄り。地私も病者なと。様を先へ送るが葦菜

を。却つてうき目見せます。是も何ゆゑ相生の松茸ゆると抱付き。楢に知らぬ松の露。落ちて松露になりやせん。あれ一群に聲高く。下向の衆のぞめき唄見付けられじと影かくす。歌我が戀路は絃なき三味よ。なんのねもせて待ち明かすそれぢやく。見れば思ひの雲の帯く。さすぢ盃。ならすと一つまるれ。いやとおしやるに。こちやも。それぢやく。さうさんせ。それぢやく。しかもよいこの。情盛りにちよきりこつきり小女房の。腰もしなへてやつくり。くるりやく。やつくりとぬめらしやんすは。二人が外に。名取川。ヲ、それ二人と二人が名取川。それぢやく。ナホスヲそれ行過ぎしと立出て。今の小唄の一節に二人と二人が名取川。ヲ、それぢやくと諺ひしは俺と其方が名取川。辻占がよい此方へと勇むは男の彌猛心。ア、嬉しいと引連れて。共に急ぐは女氣の。フシなさせするどに人絶えて。物しんくたる。寺町を

死に行く身も暫くは。こゝ生玉の馬場先に法界。無縁の勸進所。スエテ無明能化の門前に。念佛を。たより辿り寄る。地なうおちよ。心隨萬境轉と聞く時は。心は境界に隨つて轉じ變る。其方もちよといふ名を。風覺良訓信女と改め。我も八百屋半兵衛を露秋禪定門と改め。地息のある内よりはややじき人の數に入れれば。死後の身體の置所も俗縁を離れ。寺の庭でと思へども門開かねば力なし。爰は奈良の東大寺大佛殿の勸進所。先年了海和尚衆生濟度の説法を。此の所に説き始め今遷化の跡迄も。地我が親は講中の第一にて由緒ある所なれば。最期を此處と思ひ寄る。但望みもありやと問へば。なう死ぬる身に何の望み。水の中火の中でも先の世迄こな様と。女夫に成つてゐる所を。見立てて死んで下さんせと。さめく。欺けばヲ、過分なこの書置にも書く通り。養子に成つて十六年此の方。十方旦那の機嫌を取り。隙ある

日には町中を振賣し。元は僅かの八百屋店。今では人々に少々の金貸すやうに儲け溜めても。地辛い目ばかりに日を半日心を伸す事もなく。死なうとせしも以上五度。恨みある中にも其方に縁組み。せめての憂さを晴せしに。それさへ添はれぬやうになり死ぬる身に成り下る。よし

所に法の花。地紅の蓮と観ずれば。一蓮託生頼みあり。親兄弟の書置も此の状箱に入れ置け。明日は早々届くべし。サア〜観念最期の念佛忘りやるな。今が最期とすはと抜く。一尺四寸親重代我が身を切れとて譲りはせじ。かひなき半兵衛が身の果やと昔思へば手もふるひ。

體泣叫ぶ。己も翼を並べながら人の最期を急ぐ。八聲の鶴も告げ渡れば。サア〜夜明に間がない。明日は未來で添ふものを。別れば暫しの此の世の名残。十念過つて一念の聲諸共にぐつと刺す。喉の呼吸も亂る、又、思ひ切つても四苦八苦手足をあがき、三層へ身をまがき。地

ない者に連添うて半兵衛が身の因果。其方に迄ふるまひ。在所の親仁帥御にも悲しい事を聞かすと思へば。此の胸に鐔をかけ肝を猛火で炒るやうな。エ、口惜しいと拳を握り。膝に押付け身を顛はし。涙はらく〜フシ朝露につれて。流る、ばかりなり。地あれ又愚痴な事ばかり在所のと、様姉様は。こな様より諦めよい。水盃の

フシ不覺の涙せきあへず。地心覺えの西向にちよは合掌手を合せ。光明遍照十方世界念佛法生攝取不捨。南無阿彌陀佛の聲より早く引寄せ。脇指喉に押當つる。なう待つてたべ待たしやんと。身をすり退けば半兵衛。期待てとは未練

にそみて紅の。衣服に姿かい繕ひ妻の抱へを二つに押切り。諸肌脱いで我と我が鳩尾と臍の二取持つて二首の辭世にかくばかり。古今へを捨てばや義理も思ふまじ。朽ちても消えぬ名こそ惜しけれ。フシはる〜と。濱松風に。もまれ

其の上に門火迄焚かれしは。生きて再び戻るなと私に意見の暇乞。其の愚痴な事いふ手間で早う殺して下さんせ。アレ〜三方四方に半鐘が鳴る鐘が鳴る。人の來ぬ間に來ぬ間にと急ぐ最期の玉かづら。フシ夫に纏ひ泣き沈む。

地今の回向は我が身の回向。可愛やお腹に五月の男か女か知らねども。此の子の回向してやり度い。嬉しやまめで生んだらばどうして育てうかうせうかと。案じ置きは皆徒事。日の目も見せず殺すかと。思へば可愛ゆうござんすと

へくわりりと引廻し。返す及に吠かき切り。此の世の縁切る息引切る。晨朝過ぎの勸進所目すり〜門番が。見付けて心中ヤレ心中。死んだ死んだと呼ばはる聲吹き傳へたる濱松風。枝を鳴らさぬ君が代に。類稀なる死姿語りて。

弟の事言ひ出すまい。必ず其方言ひ出しやんな。地いざ此方へと毛氈を土に打敷きなうおちよ。此の毛氈を毛氈とな思はれそ。二人が一

かりにて。一度にわつとフシ聲をあけ前後。正感するばかりなり。

感するばかりなり。